

栃木県 黒羽町商工会 ミニ水車を新たな名物に 地場産材を有効活用して試作

黒羽(くろばね)町商工会の工業部(園部賢一部長)は11月8～9日の両日、町総合運動公園で開催される「くろばね秋まつり」にミニ水車を出品、展示した。家庭の庭などに設置してもらおう新商品として開発中。

ミニとはいえ、地元産のケヤキやスギを材料とした本格的な水車を目指し、木材需要が冷え込む中、地場産材の有効活用と販路拡大の一石二鳥を狙っている。

那珂川が流れる黒羽では、昭和20年代までは町の中心部に10基以上の大型水車が並んでいたという。米屋、うどん屋、粉屋といずれも仕事に欠かせない存在だった。しかし、電気に取って代われ、今は1基も残っていない。

町内の建設、製造業者などで構成する工業部は、「水の黒羽」にふさわしい新商品としてこの水車に着目。庭や店先などに設置でき

るミニ水車として商品化を目指している。

直径1.8mの試作品は現在、園部部長を中心に製作中。製作に当たる大工の西間木富雄さんは「32年大工をやっているが、水車を作るのは初めて。もうこの辺には作る人はいないのでは。清流できれいに回ってくると思うと力が入る」と腕によりをかけている。

かつては木材の産地として栄えた黒羽だが、外材に押され、林業、木材産業ともに冷え込んだままだ。今回、材料のケヤキやスギを用意した材木店を経営する坂本瞭さんは、「木材需要が落ち込む中、少しでも地場産材の有効利用を図りたい」とミニ水車の開発に期待を寄せている。

販売価格など、商品化までにはまだ時間がかかりそうだが、商工会の小倉康一事務局長も「水車には、懐かしさとともに、癒しの効果もあると思う。黒羽の新たな名物になってくれれば」と夢を描いている。



山形県 山形県商工会女性部連合会 環境、福祉をどう実践？ 「わいわい井戸端交流会」開催

10月1日、県商工会連合会の「わいわい井戸端交流会」が金山町農村環境改善センターで開催され、県内38商工会女性部員90人が参加した。

これは、同連合会女性部メンバーが、研修で学んだ環境保全や地域福祉についての知識を地域活動に結びつける実践として企画したもの。

講演やパネル討論会を通して自然保護の重要性を確認し、また段ボール製ポットを使った植栽にも取り組んだ。

初めに、モンゴルなどで緑化事業を指導している東三郎北海道大名誉教授・農学博士が「市民参加の森づくり」と題した基調講演を行い、「すぐに結果や経済効果を求めるのではなく、住民一人ひとりが参加し、次の世代に成果を残せる運動をすべき」と呼びかけ、パネル討論会では女性の視点からの地域づくりについて話し合った。

さらに、場所を同町の金山川河川公園に移し、町の木であるヤマボウシ100本と大山桜10本を植栽した。同教授が発明した段ボール製ポット「カネッコン」に苗木と用土を入れて、地面に置くだけ。春には根を張り、しかも段ボールは次第に分解される「自然にやさしい」取り組みだ。



段ボール製ポットを使った植栽

山梨県 長坂町商工会 古民家で地域交流を ギャラリーや教室に活用

長坂(ながさか)町のTMO(タウンマネジメント機関)である当商工会が整備し、町商店街の中心部にオープンしたコミュニティー施設「おいでや」が話題となっている。

「おいでや」は大正時代の建築で、医師をしていた故・植松義勝さんが医院として使っていた。妻の甲斐子さんが町に建物を寄贈する際、「私の生きている間は壊さないでほしい」と要望。その後、廃屋に近い状態になっていた建物を、骨組みや外観はそのままに改修した。

同施設は築100年近い古民家の骨組みを生かして改修しているため、あめ色になった太いはりや柱、低い天井、凝った欄間(らんま)など、趣のある作りになっている。庭もそのまま残されていて、大変美しい。

内部には、約45㎡のギャラリー、サークルの集まりなどに利用できる集会室、地元食材を使った料理教室などを行う料理室なども備えている。

9月には、八ヶ岳南ろくに住む陶芸や鉄造形、ガラス工場の作家らによる作品展「おらんうーたんをつくった作家たち、その仕事」が開かれるなど、地元の住民に活用されている。水曜定休。



宮崎県 川南町商工会 チャレンジショップ開店 空き店舗利用で集客拠点に

商店街の空き店舗を活用する川南(かわみなみ)町商工会のチャレンジショップ「よっていかんね」がこのほど、同町のトロントロン商店街にオープンした。

開店したのは手芸、木工品などを扱う2店で、買物客らがくつろ

げる空間も確保し、集客の新たな拠点として期待を集めている。

同ショップは、空き店舗を利用して3つに仕切り、1区画は1.5坪。出店した2店ともパッチワーク小物や手作り木工品、輸入雑貨などを販売している。1区画は地場産品や観光などの紹介コーナーで、探し物や譲りたい品などの情報掲示板も設置。

雑貨店を開いた小野昭子さんは、「自分の店」を持つのが夢だった。お客さまのニーズに応えられるよう、常に勉強していきたい」と話している。

同ショップは、町の商店街活性化戦略支援事業で実施されたもので、事業費は空き店舗改装費や家賃の補助など340万円、半分は県が負担している。



スクランブル

宮崎県 高千穂町商工会

情熱を燃やす経営者

バイパス開通で商店街活性へ知恵続々

高千穂(たかちほ)町商工会の中心商店街では、国道218号高千穂バイパスが全線開通し、道路事情が良くなったこと、町外へ買物に出る客も目立つことから、危険感を強めている。閉店する店や町内では品揃えが少なくなったものもあり、こうした状況を打開するため、商工会は消費回復対策に取り組み始めた。また、中小商店では従来とは視線を変えた独自の動きも芽生え始めている。

2000年度から町の補助を受け、町内で使える商品券を発行。2002年からは65歳以上を対象に「いきいきカード」事業を実施。カードの特典として買物時にポイント、スタンプが通常よりも多く加算されるほか、町内の温泉割引などもある。加入者は9月末で1,304人と着実に浸透している。また、坂道の多い商店街では、高齢者が休憩でき

るようにベンチを設置して、高齢者に優しい、対話のある商店街を目指している。

大型店に対抗して昔ながらの「ご用聞き」を始めた店もある。酒店では、酒造所と協力してプライベートブランド焼酎を販売し、幻の焼酎として話題になり、商店街関係者からも注目を集めた。

商工会はこうした商店レベルでの動きを歓迎している。興梠巨商工会会長は「地元客を離さない努力に加え、観光客に積極的に売り込んでいくことも必要。経営に新しい感覚を取り入れてほしい」と期待を込めて話す。

地元客をいかに引き留め、観光客をどのように生かすか、商店街の模索は続いている。

ご用聞きと宅配サービスの取り組みも



岐阜県 岐阜県商工会連合会

小学生が起業体験

ベンチャーキッズチャレンジ

児童に起業と労働の喜びを知ってもらう「ベンチャーキッズチャレンジ」(県商工会連合会主催)が10月11日から、笠松中央公民館で始まった。起業家精神と人材の育成などを狙いに初めて行われたもの。

県商工会連合会青年部と羽島郡内の各小学校の呼びかけで4~6年生までの児童22人が参加。模擬会社づくりから事業計画の立案、宣伝、販売、決算書の作成までを会社組織で体験する。

初日は、起業家育成教材開発会社「セルフウイング」(東京都新宿区)の石黒順子教育事業部マネージャーと梅田守彦岐阜早経大教授を講師に、役職決定や事業計画の作成までを体験。販売するのはマグネットや携帯ストラップなどの日用品で、19日には同町木曾川河川敷で開催されるリバーサイドカーニバルに出店。宣伝用ポスターの作成なども行う。

児童らは、会社運営の面白さに関心を寄せ、目を輝かせながら運営に乗り出した。県商工会連合会経営支援部の加納治振興支援課長は「これを機に、子どもらが会社経営や起業を志してくれれば」と期待を寄せていた。



富山県 富山県商工会連合会

業界動向など情報交換

ビジネス交流会を開催

県商工会連合会の商工会工業部会員ビジネス交流会が10月27日、富山市の県中小企業研修センターで開かれ、製造業と建設業を中心に中小企業経営者ら約50人が講演会や懇談会



などを通して業界動向などについて情報交換した。

講演会と懇談会は製造、建設の両業界に分かれて行われた。製造業は上野電子の上野政巳社長が「会社経営における発想の転換」、建設業は設計事務所のロジス代表で1級建築士の和田高明氏が「利益を確保する戦力転換」と題してそれぞれ講演した。

懇談会では経営コンサルタントを進行役に、後継者問題や受注状況など業界の課題や動向について意見交換。交流会や自社製品のPRなども行い、出席者が交流を深めた。

広島県 大野町商工会

「宮島お砂焼まつり」で活気づく

近隣地域6商工会女性部が「特産品アンテナ通り」を試行

宮島口商店街とその周辺は、単なる日本三景宮島への通り道になっており、観光客の減少に伴って地域が停滞している。このような状況に対応するため、歴史にもとづく「宮島お砂焼」をテーマに文化の香る地区に取り戻そうと、宮島口商店街と大野町商工会が連携し、10月19日、2002年に続いて「宮島お砂焼まつり」を実施した。

当日は、ロクロ陶芸実演、お茶会や昔の遊びコーナーのほか、通りでは獅子舞とともに太鼓が練り歩き、街角コンサート会場からはジャズやマリンバなどの音色が響き、着物着付けコーナーでは、着物姿でまつりを楽しんでもらうなど、商店街を中心に大野全体が活気づいた1日になった。

大野東小学校の児童は、総合学習で学んだことを発表しようと初参加。6年生は英語版パンフレットを作り、外国人観光客にも積極的に声をかけガイドしていた。また、3年生は、カキの誕生から出荷までを歌とセリフでつづったオペレッタや「ソーラン! 大野瀬戸

踊り」を元気に発表するなどした。

同まつり実行委員会の川原浩二会長は「2002年のまつりを終えて、各店の親睦が図られるようになった。商店街が1つになりつつある。今後はさらに新しいものを取り入れながら、盛り上げていきたい」と、さらなる商店街の振興に力をいれている。

また、「宮島お砂焼まつり」の10月19日から12月末まで、近隣地域商工会女性部が、JR宮島口駅から宮島口棧橋までに「地域の特産品アンテナ通り」を登場させ、まつりを盛り上げた。

大勢の人でにぎわった商店街



情報